みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Collecting Indonesian Artifacts

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-02-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 吉田, 集而
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004656

インドネシア民族資料調査収集旅行ノートから

吉　田　集　而*

はじめに

1975年10月11日から12月25日にかけての75日間，インドネシア各地において民族資料の調査収集にたずさわった。その旅程は表1に示したとおりである。比較的広い地域にわたって訪ね歩いたのは，インドネシア1国内にさまざまの民族が住み，多様の文化がみられるからである。

表1　調査収集活動日程表（吉田）

1975:		
October	11:	Osaka-Jakarta
	16:	-Bogor (Cianjur and Sukabumi)
	20:	-Jakarta
	26:	-Yogyakarta
	31:	-Dempasar
November	4:	-Jakarta
	6:	-Padang
	9:	-Medan
	11:	-Sidulang
	17:	-Medan
	20:	-Jakarta
	23:	-Pontianak (Sambas)
	28:	-Jakarta
December	1:	-Ujungpandang
	3:	-Makale
	5:	-Ujungpandang
	8:	-Ambon
	13:	-Ternate
	15:	-Manado
	17:	-Jakarta
	25:	-Osaka

10月20日から26日にかけての1週間は，石毛直道氏とともにジャカルタにおいて，収集許可などの接渉にあたった以外は，私ひとりの旅行であった。ただし，多くの場合，教育文化省の出先機関である博物館課の職員に同行していただいた。

今回の収集では，とくに農耕用具および芸能関係の資料を集めることにつとめた。実際の展示を考えてのことであった。各地での収集活動の概要は次のようである。

民族資料の収集はジャワからはじめた。西部ジャワ (Cianjur, Sukabumi など) において，農耕用具を中心に32点，ヨクヤカルタではワヤン(影絵人形)，バティクのサンプルとその製造用具，農耕用具など22点を収集した。バリでは Barong dance の中心になる Barong, Rangda, Celuluk, また Bade と呼ばれる葬儀用の塔の模型，そして農耕用具など30点を収集した。西スマトラのパダンにおいて，ミナンカバウの農耕用具13点，北スマトラのバタック族の村で，Sigale-gale と呼ばれる踊る人形や柩，農耕用具，生活用具など58点を収集した。このバタック族の収集で，収集費のほとんどは底をついてしまった。そのためスマトラ以後の西カリマンタン，スラウェシ，マルクでは，実際の収集よりも，今後の調査・収集のための予備調査をおこなった。インドネシアにおける収集点数は，西カリマンタンの4点，スラウェシの3点を加え

* 国立民族学博物館第2研究部

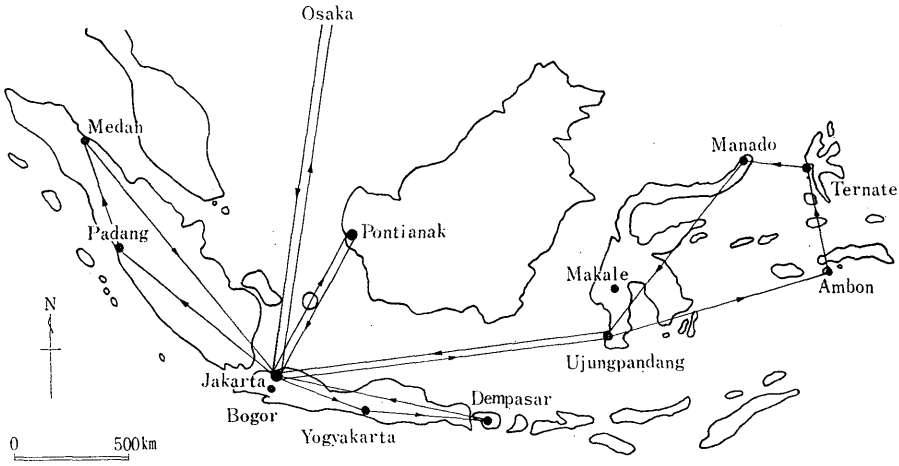

図1　収集調査行路図

て，総計162点であった。

今回の収集活動の概要は以上のようであるが，この収集旅行を通じて，とくに印象に残った2，3の事柄について次に記しておきたい。

博物館関係の組織と許可について

私のインドネシアにおける収集許可は，教育文化省 (Departemen Pendidikan dan Kebudayaan，文部省に相当する) の文化局 (Direktorat Jendral Kebudayaan) の局長，Prof. Dr. I. B. Mantra によって発給されたものであった。

博物館に関係するインドネシア側の組織は，この Dr. Mantra 氏が中心的人物である。教育文化大臣 (Prof. Dr. Syarif Thayeb) の下に各局があるが，その1つの文化局である。文化局は2つの部局を持ち，1つは博物館部 (Direktorat Museum) であり，他は歴史・考古部 (Direktorat Sejarah dan Purbakala) である。博物館部の下に各地の博物館が組織されている。博物館中，最大でかつ中心的な博物館がジャカルタにある中央博物館 (Museum Pusat) である。

一方，各地には教育文化省の直轄の出先機関 (Kantor Wilayah Departemen P. dan K.) があり，教育文化に関する各部門が設置されている。その中に，博物館・歴史・考古課(Bidang Permuseuman, Sejanah dan Purbakala, 以下，博物館課という) があり，各地の博物館はこの課と密接な関係にある。多くの場合，博物館課の課長が博物館の館長を兼任している。この博物館課は出先機関の1部門ではあるが，文化局（同時に，博物館部および歴史・考古部）の下部組織でもあり，2本の命令系統をもつ二重組織になっている。

私は文化局，博物館部，歴史・考古部の3個所に収集の許可を申請した。その結果，文化局長 Dr. Mantra は，博物館部長 Drs. Moh Amir Sutaarga にこの件について諮問し，Sutaarga 氏の了承のもとに，収集許可が発給された。そして，それと同時に，各地訪問先の出先

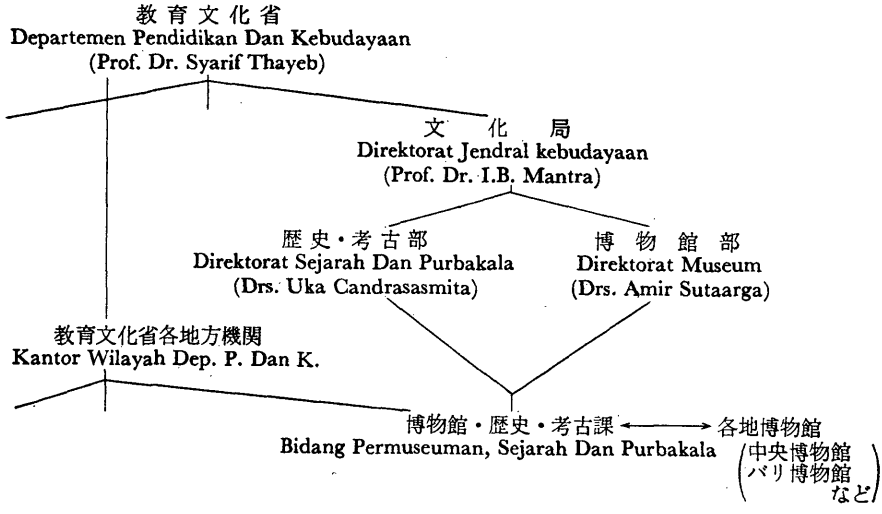

図2　博物館関係の組織図

機関の長に私の調査収集活動に助力を与えること，および私の活動・収集品についての報告を文化局におこなうようにとの指示書が発送された。

歴史・考古部は，収集品の国外持出しの許可証を発給する。そのため，あらかじめ収集することを報告しておかなければならない。民族資料の国外持出しに際しても，特別の許可がないかぎり，1931年以前の古い品々は条例により禁止されている。私の場合，収集品が民族資料に限られていたため，この法にふれないかどうかの検査は中央博物館がおこない，いずれも持出し禁止品でないとの証明書を発行してもらった。この証明書をつけて，歴史・考古部に持出し許可の申請をおこなった。民族資料に含まれないと考えられるものについては，歴史・考古部が直接，検査し許可証を発給する。

また，持出しに際しては，貿易省の輸出入課および税務局の輸出入課に，これらの物品が学術上のものであり，商業上無価値のものであって，無税の処置をとってくれるように，連絡しておかなければならない。

地方博物館の新設

インドネシアにおいてもいろいろの博物館がある。バティック博物館やワヤン博物館という特殊な博物館まである。しかし，一般にいう博物館は，歴史民族博物館をさしている。組織上，この館の運営にあたるのは，博物館・歴史・考古課であることからも当然と思われる。

ヨクヤカルタやバリには，ジャカルタの中央博物館につぐほどの相当に立派な博物館がすでにあるが，他の地方には，それほど多くの博物館があるわけではない。

パダンでは博物館が建築中であった。来年(1977年)には開館の予定である。メダンでは，博物館の建設用地を物色中であり，博物館に，将来展示されるであろう標本が集められていた。北スマトラに

は，バタック族の博物館がすでに2つも建てられている。1つは古くからあるシアンタール(P. Siantar)のSimelungun族の博物館，もう1つは，数年前に新しくバリーゲ(Balige)に建てられたToba族の博物館である。メダンには，博物館はないわけではないが，州政府による博物館はなかったのである。西カリマンタンのポンティアナックでは，博物館の建設用地をすでに決定しており，数年の内に建設されることになっている。ウジュンパンダンでは，かつての城塞の中の建物の1つを博物館に転用し，開館したばかりであった。アンボンでは，パティムラ大学の体育館をゆずりうけ，博物館に模様がえしつつある。そして，現在の手狭な展示場から，ことしの(1976年)6月に移転する予定になっている。マナドでは，博物館建設の話が進行中であった。そしてそれと平行して，展示物の収集も進められていた。

私の訪ねた地方では例外なく，博物館建設の話を聞かされた。ジャカルタであった博物館課の人々も，博物館建設の話を口にしていた。今，インドネシア各地で，急速に博物館の建設が進められていることは間違いない。この時期に，どうして各地方に博物館が建設されなければならないのであろうか。

インドネシアは多民族国家である。この国を統一あるものにするためには，ナショナリズムを注入しなければならなかった。スカルノ時代に国の隅々までに小学校がつくられ，インドネシア語による教育がおこなわれた。“われらインドネシア人”という考え方は村の隅々まで浸透した。しかし，そのことが同時に各民族の文化の崩壊をも促進した。また，物質文化も近代化の波の中で，大きく変わろうとしている。しかも，ここ数年のインフレによって，その速度はさらに増している。

地方の博物館は，この崩れゆく民族文化，とくに物質文化を残そうと企てていると思われる。しかし，それだけではない。各地博物館は民族資料の相互交換をはかり，他の地方の物質文化をも展示しようとしている。このことは，各地の人々に，いながらにして，他の民族の文化を学ばせ，その違いを知らせると同時に，その同質性をも理解させようとしているようである。“インドネシア人は一つ”という考え方から，インドネシアは多民族国家であることを了解させるとともに，その上でのインドネシア国家を建設してゆこうとしているのではなかろうか。

私は，これらの地方博物館が今後，どのように運営され，どのような機能をはたしてゆくのか，興味深くみてゆきたいと考えている。

ミニ・インドネシア

地方博物館の建設ラッシュに対応して，その動きはジャカルタにおいて，もっとも顕著な形でみられた。

ジャカルタには，有名な中央博物館がある。展示品数，その質の良さ，展示面積のいずれをとっても，インドネシア最大の博物館である。実際，その展示は各地の民族資料にとどまらず，古陶器類，バリや中部ジャワの石彫，さらに考古学の標本をも含み，広い館内いっぱいに展示されている。

しかし，所狭しと展示されているのは，この博物館が収蔵庫と呼べるような場所をほとんど持っていないことによる。し

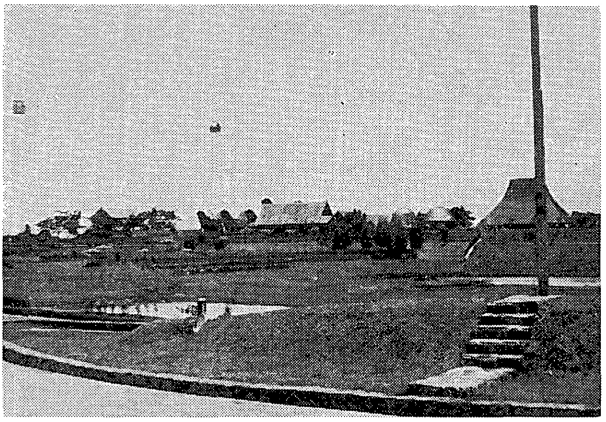

写真1　ミニ・インドネシア

かも，博物館の隣接地は他の建物によってふさがれ，拡張できるような場所をもはや持たない状態にある。中央博物館はすでに成長を終えた博物館であり，発展の余地はもうなくなってしまった博物館である。この博物館に新たな使命を負わすことはできないことであろう。そのため，ジャカルタでは新たな博物館が要求されていた。ジャカルタ郊外のハリム国際空港の近くに“ミニュアトゥール・インドネシイ”，通称“ミニ・インドネシア”とよばれるものが建設された。この6月に開設されたばかりのミニ・インドネシアは，現在においても建設が続けられており，完成までにはなお日時を要することであろう。

会場の中央には巨大な池が堀られ，会場の中をトラクターに引かれたミニ・バスがゆっくりと走り，頭上にはスカイ・リフトが往来しているさまは一見，博覧会場や遊園地のごとくである。しかし，ミニ・インドネシアの中心になっているものは，これらの道具立てではなく，インドネシアの代表的な民族の伝統的な家屋群である。アチェ族の家もあれば，バタック族の家も，ミナンカバウ族の家も，中部ジャワの王宮やバリの王宮，西カリマンタンのスルタンの王宮もある。トラジャ族の木彫りの美しい家や，ブギス族の家，あの有名なダヤック族のロングハウスもあれば，ニューギニアの家やニアスの家もある。模型ではない。すべて本物である。現地にある家屋とはまったく同じ材料が用いられており，現地の大工によって建てられたものである。この極めて良質の家々が30軒以上も一堂に集められているさまは，まさに壮観であった。

また，この家々は小博物館でもある。それぞれの民族の生活用具や衣装などの民族資料が展示されている。

また，バリの寺院，ジャワの仏教寺院の復元されたもの，モスク，キリスト教の教会の本物も建てられている。ハンディ・クラフトのショッピング・ビルもあり，大統領の豪華な接見の間，その裏側にはバリ風の木彫で飾られた大舞踏劇場があり，民族芸能が上演されている。

ミニ・インドネシアは，間違いなく世界有数の一大民家博物館なのである。

ミニ・インドネシアの建設は政府のみの力によってなされたものではない。地方自治体23州によって，中心的展示物で

ある家々が建設された。各自治体の民族文化のショウ・ウインドウとして，競って建てられたものである。各州の力の入れ方も相当のものであったらしい。そのため，極めて立派なものがつくられた。むしろ立派すぎるきらいがないでもないほどである。

ミニ・インドネシアは，現在各地で進められている博物館新設のジャカルタ版，あるいはインドネシア国家版なのであろう。地方博物館をみたり，あるいは新設の計画の内容を聞いてきた私には，ミニ・インドネシアの素晴らしさに驚嘆するとともに，地方博物館の貧弱さを改めて認識させられた。それは同時に，中央中心のこの国のあり方を認識させられる思いであった。

サゴヤシ

12月8日，私は熱風の吹くアンボン空港に立っていた。小さな空港には，ジャカルタに帰る人，テルナーテに行く人，ニューギニアのビアクから帰ってきた人などでごったがえしていた。アンボンは，東部インドネシアの旅行の中心地なのである。

空港から町への道の両側にサゴヤシ林が続く。アンボンは，いろいろの顔を持つ島であるが，その1つはサゴヤシの島という顔であろう。かつて，この島の住民は米を食べていなかった。現在でも，アンボン島では稲は栽培されていない。隣の島であるセラム島に，近年になって入植したジャワの人々が作る米を移入し食べている。米のかわりに，かつてはサゴをアンボンの人々は主たる常食としていた。そして，現在において，なおサゴは常食の一部をになっている。

村々で民族資料の予備調査をおこないながら，サゴについての調査も試みた。アンボンでは，サゴに4種類あるという。sagu molat, sagu ihor, sagu tuni, sagu makanaru の4種である。このうち，sagu molat のみが葉鞘にトゲがなく，植物体の大きさ，葉の大きさ，デンプンの収量などの点は，sagu ihor と変らないという（写真2）。sagu tuni は，sagu ihor に比して葉が小さい点が異なり，sagu makanaru は，植物全体の大きさが，sagu ihor や sagu tuni よりもさらに小さいという。また，sagu makanaru は，アンボンではまれな植物で，ほとんどみかけない種である。逆にもっとも優勢な種は，sagu ihor であるという（写真3）。実際に村人とサゴ林をみてまわったが，sagu makanaru は1本もみつけられなかった。sagu

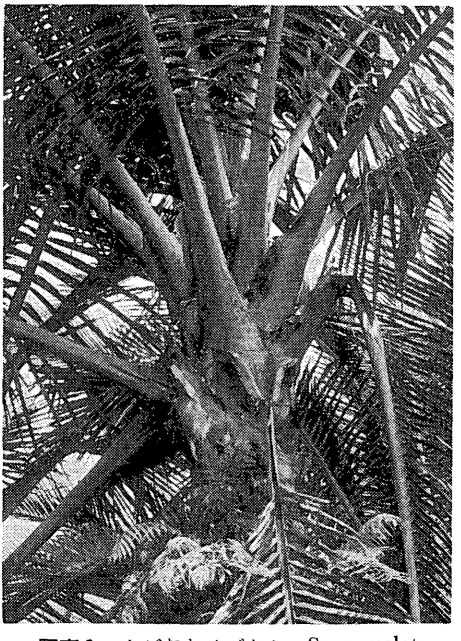

写真2　トゲなしサゴヤシ，Sagu molat (*Metroxylon sagus* Rottb).

写真 3　Sagu ihor (*Metroxylon Rumphii* var. sylvester)

tuni やsagu molat は sagu ihor の林の中に混在していた。

Deinum の記載 [Deinum, 1948: p. 609] と照合してみると，sagu molat は *Metroxylon sagus* Rottb., sagu tuni は *M. Rumphii* Mart., sagu ihor は *M. Rumphii var. sylvester*, sagu makanaru は，*M. Rumphii var. longispinum* であると推定される[1)]。

私はアンボンではじめてサゴヤシをみたのではない。西カリマンタンの海岸線でも多くみていた。また，アンボンの後に訪ねた北スラウェシの Klabat 山の西斜面にある Tatelu 付近の水田近くで，また Tondano 湖周辺においても，多くのサゴヤシをみた。しかし，これらのサゴヤシはいずれもトゲなしの *M. sagus* がほとんどあった。*M. Sagus* と *M. Rumphii* の優勢度は，テルナーテとスラウェシの間で劇的に変る。

サゴ・デンプンの採集法は，すでにいろいろ記載されているので，[Burkill, 1966; Deinum, 1948; 泉, 1948; Heyne, 1950; Barrau, 1959; Thacker, 1962] それらと比較しながら簡単に記しておく。

サゴヤシは，花が咲くときに幹のデンプンを消費してしまう。そのため，花が咲く以前に採集される。採集されるまでの年数はさまざまで，9～15年 [Burkill, 1966: p. 1485; Thacker, 1962: p. 353], 10～20年 [泉，1948: p. 348] あるいはよい条件では10～12年，そうでない場合は15～20年，また Bengkalis では9年 [Heyne, 1950: pp. 331-2] といわれる。私が聞いた年数は5年で，それ以上では花が咲いてしまうという。

この年数のばらつきは，変種によるとも考えられるが，むしろ個々の生態条件の差がヤシの生長速度とより強く相関していると考えられる。

また，ヤシが充分に生長し，デンプンの含有量が高まっていることを判定する方法，すなわち採集時期の決定方法にもいろいろあり，そのことが，採集される樹令のばらつきの一因であると考えられる。泉によれば，サゴヤシに新しい葉が生じなくなったとき [泉, 1948: p. 348],

1) Deinum によれば，アンボンにおいては，sagu tuni, すなわち，*M. Rumphii* が最優勢種と記しているが，私の観察では，sagu ihor すなわち，*M. Rumphii var. sylvester* が最優勢種であった。またアンボンには少ない（セラムに多いという）が，sagu rotan あるいは sagu duri rotan とよばれる *var. longispinum* があるというが，残念ながら，この変種については今回は見なかった。

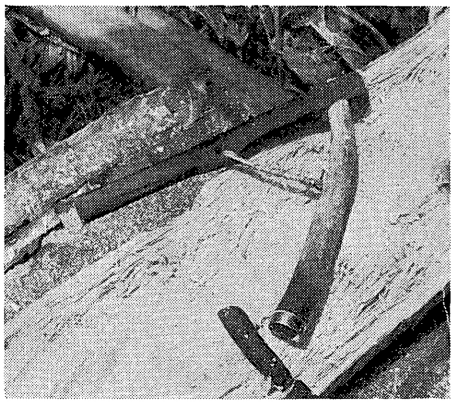

写真4　nani; サゴ原木をかきとる道具

また幹に穴をあけ，髄部の一部をとり出して調べる方法 [泉，1948: p. 351; BURKILL, 1966: p. 1485]，葉軸の色が白味をおびるようになることによって，あるいは頂端の葉が短かくなることを判定の基準としている [BURKILL, 1966: p. 1485; DEINUM, 1948: p. 611]。私の調査では，頂端の葉にトゲがみられなくなったときに切り倒すという。

樹の根本から 10–20 cm 位の高さの位置で切り倒し，幹を2つに切る。さらに縦方向に2つに割り，nani（写真4）という「サゴ打棒」で打ち落しかながらかきとってゆく(写真5)。nani にもいろいろのタイプがあるが [泉，1948: p. 349] nani の打ち落す末端にブリキの輪がつけられているものもあった。幹の髄は比較的もろいもので，たたくだけで充分にかきとることが可能である。一方，小川の近くに，サゴ沈澱器がつくられる。サゴヤシの葉鞘でつくられた上段の容器に先に採集した粉末を入れる。この容器の舟型の沈澱器に注ぐ側にココヤシの葉鞘の付け根にある繊維をとりつけ，沪過の役割をさせている。これを runut という。現在では，木綿の布をつかうことが多い。水を注ぎながら粉末をもむようにして，デンプンをしぼり出す(写真6)。繊維などの夾雑物は runut でとりのぞかれる。舟型の沈澱器 (goti という。サゴヤシの幹と太い葉鞘の基部の部分とで造られる）にデンプンと赤味を帯びたしぼり汁がたまる。次々にしぼり出されるため，上澄液は除々に流れ出てゆく。この装置は，夾雑物をとりのぞく機能と，水さらしの機能をかねそなえたものである。

このようにして採集したデンプンは，

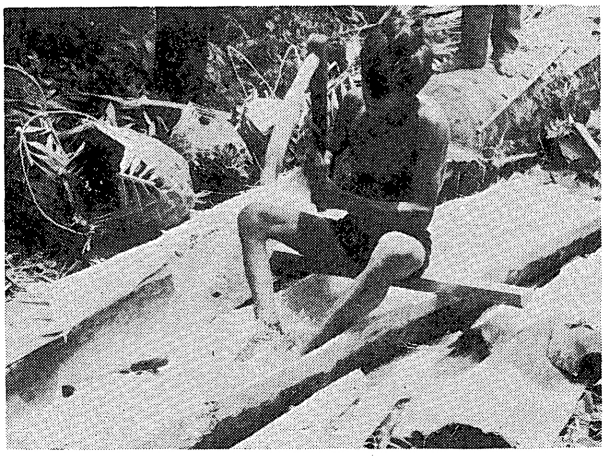

写真5　足でおさえて，nani でサゴをつきくずしてゆく。

写真6　サゴ・デンプン採集用具。ほとんどすべて，サゴヤシでつくられている。

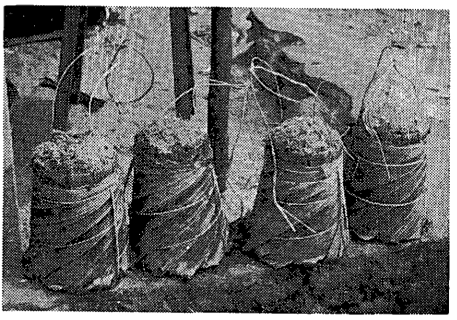

写真7　市場で売られているサゴ・デンプン。tuman に入れられている。

サゴヤシの葉でつくられた tuman[2] というカゴに入れられ，上端をしぼりかすのサゴの繊維でふたをする（写真7）。1カゴ 5 kg ほどで，市場で 500 Rp. で売買されているという。

サゴ・デンプンの食べ方

サゴ・デンプン (tepeng sagu) の典型的な食べ方は，papeda と lempeng であろう。

papeda は次のようにしてつくる。

まず tuman から tepeng sagu（サゴ・デンプン）を ayak（ふるい）の上にとり出し，その下に sempe という水盆のような土器をおく。水で洗うようにして，水とともにデンプンを一度こす。その上澄液を捨て，水切りをし，改めて水をひたひたよりは多い目に入れる。それに tomi-tomi という *Citrus sp.*（レモンの仲間）のしぼり汁を加える。ついで熱湯を少しずつ入れながら，aru-aru あるいは entong とよばれるシャモジですばやくかきまぜ，半透明のもち状のものを作りあげる。これを papeda という。

papeda をよそう2又の棒がある。gata-gata papedaという。これはgaba-gaba（サゴの葉軸を乾燥したもの）の皮でつくられる。gata-gata をくるくる回転させながら，papeda をまきとり，各自の皿にもられる（写真8）。皿には colo-colo（酢に，トウガラシ，タマネギの1種のきざんだものを入れたつけ汁。普通，焼魚，あるいはにた野菜をつけて食べるためのつけ汁）が入っており，指で適当に切って食べるか，あるいは直接口ですすりこむ。空になった皿に

2）泉によれば，「つと」あるいは toma というという [泉，1948: p. 350]。

写真8　papeda を gata-gata でまきとり，皿にもられる。

papeda を追加して食べてゆく。ときには，colo-colo のかわりに，air jai（黒ザトウを湯でといたものにきざみショウガを加えたもの）につけて食べることもある。

sagu lempeng は，まず tuman からしめったサゴを箕 (nyiru) にとり，平にして，para-para というカマドの上につくられた棚の上におく。2～3日すると，熱と煙で乾燥すると同時にすっぱさも消えてしまう。これを一度ふるい (ayak) でこし，こまかなさらっとしたデンプンにする。porna sagu とよばれる土器製の型をうつぶせにして火の中に入れ，真赤になるまで焼く。焼かれた porna sagu をとり出し，suhujjo という竹製の道具を用いて，その型の中にデンプンをつめてゆく。そして，その上にバナナの葉をかぶせ，石で重しをして20～30分間放置する。これは，まさしく石焼料理である。焼き上ったものを lempeng という（写真9）。gata-gata lempeng とよばれる2又の棒で型からとり出す。

lempeng をお茶あるいは湯につけて

写真9　市場で売られている lempeng

食べるのがもっとも簡単な食べ方である。しかし，papeda と同様に colo-colo あるいは air jai につけて食べる方が好まれる。とくに air jai とはよくあう。

他に bagea と呼ばれるサゴで作られるお菓子類がある[3]。これは，乾燥したサゴに kenari (*Canarium commune* L. の果実）の粉をまぜ，水でねり，サトウ，シオを加えて焼いたものである。また，buburne とよばれる小さな固いダンゴ状のものがつくられる[4]。これは，アンボンではココヤシの胚乳，サトウヤシからつくられた黒ザトウ，パンダナスの葉，シナモン，ニクズクを入れた湯にとき，少し固くなったところを飲むものである。

私は，1965年の夏，村に住み込んでの調査というものを奄美大島ではじめて経験した。そのときにみた，ソテツの幹からとられたというデンプンの塊をありありと思い出していた。ヤシの幹からデンプンが採集されるものはサゴヤシのみではない。サトウヤシや *Eugeissona* [HEYNE, 1950: pp. 338–9], *Borassus*, *Caryota*, *Corypha*, *Phoenix* など [DEINUM, 1948: p. 607] のヤシ科植物の幹からもデンプンが採集されていたことが知られている。しかし，これらのほとんどは，現在では常食としての重要性をうしなってしまった食用植物群の1つである。

私は，papeda の奇妙な味を思い出しながら，かつては重要な食用植物であったであろう，これらのヤシあるいはソテツ類を水さらし技法という観点から追ってみてはどうだろうかと考えはじめていた。

ミナハサの始祖伝説

15人乗りのあぶなつかしい，小さな飛行機にのって，テルナーテからマナドについた。ここはミナハサの地である。

ミナハサ族は，スラウェシ島の北東端に住む人々である。かつて，彼等は Malesung といった。そして各地に小集団で別れて住んでいた。しかし，隣接する Bolaang-Mongondou 族との戦争の際に tonaas(to: 人，taas: 幹，指導者の意）のもとに団結して戦ったという。そのとき，みずからの集団を Minahasa といった。"mina esa" は1つになるの意である。

この話を私にしてくれたマナドの若い郷土史家は，もっと愉しい話を私に語ってくれた。それは，ミナハサの人々が何故，他のインドネシア人と違って肌が白いかという話であった。

むかしむかし，岸にうちよせる波のあぶくから，一人の白い婦人が生まれた。名前を Siluminuut[5] という。彼女はひとりぼっちだった。淋しかった。そこで神に祈った，子供を授けてほしいと。すると，彼女はみごもり，やがて一人の男の子を生んだ。名を Toar という。Toar はやがて大きくなった。彼女はさらに子供をふやしたいと神に祈った。神は

3) Deimum. によれば [DEINUM, 1948: p. 605], その型によって，bagea boender, bagea pandjang, bagea soeli などと呼ばれる種類があり，また竹筒に入れて焼いた toetoep pola とよばれるものがある。泉によれば [泉，1948: p. 351–2], ニューギニアでは濡れサゴを棒状にバナナの葉で干巻のように巻き，とろ火で煙焼したもの (amatei, jamoemo) があるという。
4) サゴ・パールとよばれるものと同じである [DEINUM, 1948: p. 606]。ヨーロッパで糊材として用いられていたものである。
5) Dixon では Lumimu-ut となっている [Dixon, 1964: p.157]。

Karemaという半神人の女性をつかわした。Karema は1本の tuis (*Ananas comosus Merr.*) の枝をとり，同じ長さに切り分け，その枝の先の方を Toar に渡し，枝の下の方を Siluminuut に渡しながらいった。「Toar は kuntung iwailan（神の山の意）を右からまわり，Siluminuut は左からまわり，2人が出合ったとき，もしその枝の長さが異なっていたら結ばれよ」と。2人は左右に別れ，Toar は右へ，Siluminuut は左から kuntung iwailan をまわった。そして2人が出合ったとき，その枝の長さは同じではなかった。枝から芽が吹き出し，長くなっていた。2人は結ばれた。そして，この2人から，現在のミナハサの人々が生れた。

この始祖伝説は，日本神話との関連のもとでたびたび引用される有名な神話である。石田が，南太平洋一円に広がる母子相姦の始祖伝説としてタナバ型となづけてとりあげている神話の1つである[石田，1971]。また小野明子が，御柱めぐりの神話として引用されている神話の1つでもある[小野，1974]。そして，その引用のもとは，Dixon の *The Mythology of All Races* Vol. 9 からである[Dixon, 1964]。Dixon のミナハサの始祖伝説と私のきいたものとでは若干の違いがある。たとえば，Siluminuut の誕生は，岩が鶴を生んだ後，汗をかき，その汗から生れたことになっている。また，私のきいた神話には世界創造の部分が欠落しているし，懐妊も西風にあたらず，神に祈ることによって起る。Siluminuut と同じ丈の杖を彼女が息子に渡す点も異なる。そして神の山を廻るかわりに世界を廻るというのも少し違うようである。しかし，杖あるいは枝が成長する点，左右に分かれて，何かをまわる点，そして，母子相姦による子孫の形成などの基本的な点はよく類似している。私のきいた神話は，ミナハサの始祖伝説の異伝なのであろう。

相異なる点で，もっとも重要なのは Siluminuut の誕生の項であろう[6]。Dixon の神話では，ミナハサ族の人々がなぜ肌が白いのかを説明していない。また，波のあぶくからの誕生は，よりいっそう，流着したことを明確に想像させる。そして，この項によって，この神話が，洪水伝説，母子相姦と連なるタナバ型の伝説に含まれることは明瞭である。

私は彼からこの話を聞かされたとき，石田氏の説を知らなかった。神話などについぞ興味などもたなかったからである。しかし，タナバの伝説や，伊邪那岐命・伊邪那美命の話は知っていた。彼にこの2つの話をかいつまんで話した。聞き終ったあと，彼は眼を輝かしながらいったものである。「私達の祖先は，日本人にちがいない」と。

私は彼に，今度あったとき，タナバ型の神話のいろいろをぜひ彼に話したいと思っている。

おわりに

ここ数年来，インドネシアの物価の高騰はすさまじいものである。ジャカルタの物価はついに東京のそれに匹敵するま

6) 小野は，「海洋の大岩から生れた女神ルミムトゥは……」としているが，これは誤訳でないかと思う。Dixon のこの項を読みくらべると，石田の訳が適切であると思う。

でになってしまった。資料の購入計画もこの物価の前に，旅行途中で資金不足という形で変更をよぎなくされた。スマトラ以後では，眼の前にすばらしい資料があるにもかかわらず，買うことができなかった。また，いろいろ手配をしておいて下さった方々に御迷惑をかけてしまった。私はいつか，それらも当博物館に収蔵されるであろうことを願っている。しかも，急いで収集されなければならないように私には思えた。インドネシアの変化はいよいよ早まってきた感じである。

75日間の短い旅であった。短期間であるがゆえに，むしろ多くの方々にお世話になった。名を記して，感謝の意を表したい。

博物館部長，Drs. Moh Amir Sutaarga 氏には公私にわたって，さまざまの御助力をいただいた。また，Jakarta の Museum Pusat の館長，Drs. Bambang Soemadio，をはじめ職員の Drs. Hamzuri, Drs. Suwati Kartiuri, Yogyakarta の博物館課長 Rahmadi Prajasudira 氏，Bali の博物館長，Drs. I Made Sutaba，職員の I Wayan Widia 氏，I Gusti Bagus Arthanegara 氏，I Made Seraya 氏，Medan の博物館課長 Drs. E. K. Siahaan，職員の Drs. S. D. Napitupulu, Pontianak の博物館課長 Ja Achmad，西カリマンタン政庁の Drs. Muaji Harun, Ujungpandang の博物館課長，M. Nur Rasuly 氏，Makale の L. T. Saranga 氏，Ambon の博物館課課長代理，D. Tutupoho 氏，Ternate の Sj. Umasangadji 氏，Manado の博物館課長，Drs. J. P. Tooy など，各地博物館課の方々にいろいろお世話になった。

さらに西部ジャワの収集に際しては，L. B. N. の所長，Dr. Setiyati Sastraperaja, Herbarium Bogoriense の keeper, Dr. Mien Rifai，および職員の Harry 氏，にお世話になった。

また，ジャカルタ日本大使館の石田実氏，柳井俊二氏，Yogyakarta の Ibu Dr. Sarjito さん，Malino の Reppe 氏，Sidulang 村の方々など，多くの方々にお世話になった。

最後に，収集許可を下さった Prof. Dr. I. B. Mantra に深謝する。

文　献

BARRAU, Jacques, 1959, "The Sago Palms and Other Food Plants of Marsh Dwellers in the South Pacific Islands", *Economic Botany*, Vol. 13, pp. 151–162.

BURKILL, L. H., 1966, *A Dictionary of the Economic Products of the Malay Peninsula*, Governments of Malaysia and Singapore, pp. 1484–1486.

DEINUM, Hk., 1948, "Sago", *De Landbouw in de Indisehe Archspel* IIA, N.V. Vitgeverijw van Hoeve. p. 604–621.

DIXON, Roland B., 1964, *The Mythology of All Races*, Vol. IX Oceanic, Cooper Square Publishers, pp. 157–158.

HEYME, K., 1950, "*De Nuttige Planten van Indonesie*", N.V. Mitgeverijw. van Hoeve, pp. 330–339.

石田英一郎，1971，『石田英一郎全集』6巻，筑摩書房，pp. 157–165.

泉　靖一，1948，「サゴ椰子の生み出す文化」『民族学研究』Vol. 13–4, pp. 36–49.

小野明子，1974，「日本神話とインドネシア神話」『日本神話の比較研究』法政大学出版局，pp. 159–200.

THACKER, M. S. et al, 1962, *The Wealth of India, Raw Materials* Vol. 6, Council of Scientific & IndustrialResearch, pp. 352–353.